

「尺八音楽～天の音色に魅せられて～」

クリストファー遙盟

司会者 師走の忙しい日に大勢お集まりいただきまして、ありがとうございます。今日は大変気持ちのいいお天気になりました。もうご存じの方も多いと思いますが、いつも来てくださっている方もいらっしゃると思いますが、私どもの教養文化研究所では、年に3回、このように公開講演会を開いております。今日は本年度の最後の講演会になりますが、大変珍しい方に来ていただいております。

アメリカ人でいらっしゃるながら日本の芸大で学ばれて、尺八の名取りでいらっしゃるクリストファー遙盟さんでございます。マッカーシー先生が皆様にクリストファー遙盟先生をもう少し詳しくご紹介くださいます。それでは、マッカーシー先生お願いします。

マッカーシー はい。私は、共通の友達である映画評論家のドナルド・リッチー先生のご紹介で、10年ぐらい前にクリストファー遙盟さんと知り合いました。

クリストファーさんはアメリカのテキサス州生まれです。ブッシュ大統領と同じですけれども、別に関係ないと思います。1972年に来日されました。竹盟社宗家・人間国宝故山口五郎師に師事しまして、1982年に東京芸術大学大学院を修了して民俗学修士になりました。国際交流基金のスポンサーで、いろんな国に行つて講演とか演奏をなさっています。



CDをたくさん出しています。いろいろありますけれども、今日は、実は、そのうちの1枚の「浩々妙音」というのを10枚ほど持ってきましたので、もしご関心がある方がいらっしゃれば、どうぞ演奏が終わってから先生に直接お話しになってください。

あと、尺八の演奏家だけではなくて執筆家でもあります。「尺八オデッセイ～天の音色に魅せられて」という素晴らしい本がありまして、これは京都の東本願寺財団の蓮如賞を受賞されたものです。ほかに詳しいことは裏のプロフィールに書いてありますので、どうぞお読みください。

それでは、簡単なイントロダクションですけれども、クリストファー遙盟先生、よろしくお願ひします。（拍手）

クリストファー 竹中先生とマッカーシー先生に、すごい紹介をしていただいた気がします。僕は単なる尺八吹きにしかすぎません。竹吹き。それだけです。竹が奏でる音色に魅せられて、いろいろ深く入ろうと思っただけですけれども、こんにち、このような所に立ってしまいました。

それでは、話を続ける前に一つ演奏したいと思います。スピーカーの音をちょっと落とすことはできますか。ちょっとキンキンします。ちょっと必要だと思うんですけども、調整はできますか。ハウリングを起こしています。ごめんなさい。音を大事にしたいんです。ちょっとだけハウリングを起こしているのが気になります。とりあえず演奏のほうに参りましょう。

（演奏）

クリストファー 今の曲は「調子」と言う曲です。「調子」は、名前のごとく調子を取るためのプレリュードです。だから、本演奏が始まる前に一つの前奏として演奏する曲です。

これはどういうことかという、例えば運動をやる場合には、いきなり運動をすれば、きっとけがをするし、あまりいい運動はできないです。運動の場合にはウォーミングアップをします。僕は合気道をするのですけれども、合気道をする前には手首を慣らしたりとか、首を慣らしたりとか、必ずいろいろウォーミングアップをします。それをするによって、運動がより効果的になるわけです。

音楽の場合は、自分のためだけではなくて、聴いている人の耳を澄ますためにやるものです。だから、日本音楽では、ほとんどすべてのジャンルにおいて、こういう「調子」みたいなプレリュードがあります。例えば能を見に行くと、能が始まる前に、後ろから能管の笛が聴こえてくるわけです。それはオキと言うのですけれども、これから演奏が始まるとか、または神々を呼ぶような役割でもあると思います。

尺八の場合、この「調子」は場を整える、雰囲気を作る、みんなで一緒に気持ちになるという役割だと思います。だから、短くてもいいですけども、演奏する前には必ず「調子」というのをやります。

尺八は、もちろん日本の楽器ですが、日本において、けっこう長い歴史があります。最初は平安時代あるいは奈良時代で、中国大陸から渡ってきた雅楽という宮廷音楽でした。今でも宮内庁とか、いろんな所で、特に正月になると雅楽演奏があるんですけども、かつては尺八も雅楽の中に入っていたわけです。

今、奈良の正倉院に行ってみると、古い雅楽のいろんな尺八が残っているわけです。大体、雅楽の尺八は今の尺八と随分違います。今日のこれは正倉院のものではないですけども、正倉院にある楽器を復元した雅楽尺八です。だから、尺八が最初に日本に入ってきた時には、こういう形だったんです。ちょっと小さくてかわいいですね。

一つの大きな違いがあります。尺八の手穴の数は5個あるわけですけども、これは6個あります。どういう音がするかというと、ちょっと聴いてみてください。

(演奏)

クリストファー まず、音階は完全にドレミファソラシド。リコーダーとピアノでやるのと大体同じ音階です。7世紀だから、およそ1300年前から雅楽では7音階を使っていた。7音階というふうに考えたわけではなくて、たまたまそういうふうになっているんだと思います。

音は非常に大陸的で、中国という感じがするんですが、ここの大きな違いとしては、今の尺八はあまり大きな音は出ません。非常に小さな音で、このぐらいのスペースに適している音だと思います。

ちょっと考えてみれば分かるように、雅楽という音楽形態は、大抵、外で行われていました。例えば752年に東大寺の大仏の開眼式があった際には、いろんな国からたくさんのお坊さんが来て、野外劇だったので野外で演奏したわけです。そうすると、例えば箏（ひちりき）は非常に大きな音ですし、また雅楽の笛の龍笛も非常に大きな音です。それに対して、これはあまり目立たない。ほとんど聞こえていなかったと思う。

12世紀の平安時代末期になると、どういうわけか雅楽尺八の姿が消えてしまいます。今のようには、雅楽の中では尺八が使われていません。

では、尺八はどういうふうにとどこからどこに行ったのかというと、大体お坊さんたちが使うようになった。12世紀、13世紀のいろんな書物を見てみると、だれれさんが尺八を経の伴奏として使ったりとか、仏教の儀式の中で使ったりするわけです。唱名と一緒に尺八を吹いたりした時期がありました。唱名は、お経を上げるときの音楽

です。中世時代には、それがずっと続いていたんです。

そして、今度は一休禅師。一休さんですね。漫画とか、いろいろあるんですけども、どうも一休さんは尺八がすごく好きだったみたいです。彼が残した漢詩集の「狂雲集」の中では、尺八の詩が何と5、6回ぐらい出てくるわけです。漢文だからちょっと読みにくいですが、今、解説して読むと、けっこう面白い。尺八を持って、いろんな悟りを促すわけです。「俺が尺八を吹くから、おまえたちは悟りなさい」とか、「尺八の音はものすごい音だから、よく聴けば自分のいろんな世界が開けてくる」とか、そういう切迫感を持った尺八吹きだったと思うんです。そこで、尺八と瞑想とが結び付いてしまいます。

このように、お坊さんたちが尺八をよく吹いていたんですけども、江戸時代になってくると、一つの組織を作り上げていきます。それはどういう組織かという、尺八を吹くことによって自分が悟ることができる、要するに瞑想をすることができるというものです。その組織は禅宗の臨済仏教と関係があって、普化宗という宗派を作り上げてしまいました。これが17世紀、18世紀ごろの江戸時代です。

「座禅」という言葉があります。座禅は座って禅をする。彼らは「吹禅」と言い、吹いて禅をする。禅は、いろんなかたちでできると思います。例えば禅は、歩きながらもできるし、座って瞑想をしながらもできるし、尺八を吹きながらもできる。そこで、普化宗の僧侶たちは尺八を持って禅を行ったわけです。それを吹禅と言います。

彼らが結集した普化宗には、虚無僧という形態のお坊さんたちがいました。彼らは、天蓋（てんがい）という深い編み笠をかぶりながら尺八を吹いていました。多分、時代劇とか歌舞伎を見ると、今でも時々そういう虚無僧姿を見ることができます。普化寺は全国にあって、それぞれの普化寺に曲が伝わっていました。彼らは、そのお寺に行って、曲を習ってくるわけです。

この曲が本曲です。本来の尺八の音楽という意味だと思います。本曲は、もともと瞑想するための手段です。音楽をするという意味よりも瞑想するという意味に近いと思うんです。われわれが古典音楽をやる場合、やはり尺八の本曲には今でも力を一番入れております。現代の本曲は、ほとんど江戸時代から来たわけです。20世紀に入ってくると、音楽的にいろいろ変わってくるのですけれども、こんにちの本曲は基本的に江戸時代にできた。

本曲については、しゃべるよりも実際に吹いたほうが良いと思います。今度、演奏するのは「虚鈴」です。プログラムの中にその名前が書いてありますけれども、この「虚鈴」という曲は、非常に飾りのないストレートに吹く曲です。音楽的にあだこ

うだと言うよりも、聴いたほうが、また吹くほうが自分の精神、自分の魂がどういふふうになっているかを見つめる機会を与えてくれると思います。現代のカチャカチャする音楽とは全然違います。こういう曲を聴くときは、どちらかという目をつぶって聴くのが一番いいかもしれない。それでは、「虚鈴」という曲を演奏します。

(演奏)

クリストファー 聴いて分かると思いますけれども、この曲は構造的に非常に簡単にできているわけです。「ツー・エー・ウー」の大体三つの音しかありません。尺八自体も非常にシンプルにできています。このようなシンプルな曲、飾り気のない曲は、かえって精神性が深いと思います。

今は、世界がより複雑になって、コンピューターとかインターネットを使ったり、いろんな複雑な音楽を聴いたりすると、時々こういうシンプル・イズ・ベストという……。簡単であるからこそ非常に深いものがある。これが、まさに尺八の世界だと思うんです。

こういう虚無僧尺八になると、こんにちみみたいな根っこの部分を使った尺八を使うようになります。さっきお見せしたように、それ以前の雅楽の尺八は非常に細くて、音も細いです。そして、中世時代に一休さんたちが使ったような尺八も、また華麗な非常に淡い音がします。これは厳密には尺八とは言わないで、一節切（ひとよぎり）と言います。

(演奏)

クリストファー 今、適当に吹いたんですけれども、今の尺八よりも音が軽くて、音階はあまりいろいろできないわけです。虚無僧たちがこういう大きな尺八を好んだ一つの理由は、半音階もできるということです。だから、いろんな音階ができるし、音も大きくなる。

そして、もう一つ大きな理由がありました。この二つの尺八の音の違いを見ると、すぐに分かるんですが、一つヒントをあげます。虚無僧たちの中には、浪人たちがいっぱい入っていました。要するに、自分の上の人を失って、自分で刀を持つことができない身分の浪人たちが、たくさん虚無僧になりました。浪人だったら、かつては侍でしょうね。いつも刀を差していたんですけれども、もう浪人だから刀を持つことを禁じられているので、今度は尺八が一つの武器になるわけです。だから、尺八は根っこの部分を使うようになって大きくなった。これは多分本当だと思います。武器になりやすいという非常に面白い説もあるんです。僕は武器にしたことはありませんけれども、やろうと思えば、けっこう武器になると思います。ただ、それよりも、やはり

音が非常に自由になり、大きくなる。

さて、尺八の構造とか、今の楽器をちょっと見てみたいと思います。まず、尺八は大体奈良時代、平安時代に日本に入ってきたんですけれども、それ以前は中近東とか中国にたくさんありました。縦笛というのは、大体どこの国でも、どこの文化でもあるわけです。今日は、いろんな縦笛を持ってきたので、ちょっとそれぞれ吹いてみたいと思います。

まず、大体何でも笛になります。これは100円のメガネです。このメガネとケースで100円なので、本当にすごく買い得だと思っんですが、このケースを持って・・・。

(演奏)

クリストファー これも笛になるんです。

今日は、たまたま竹中先生が持ってきてくれたすごいものがあります。これは中国で埋蔵された・・・どの辺だったかな。お墓・・・。中国だから、紀元前5000年でもおかしくないわけです。これは、現代よく売っているオカリナと似ているけれども、ちょっと違う。オカリナは吹けば音が出るんですけれども、これは、さっきの100円メガネと全く同じ原理です。

(演奏)

クリストファー 今日、初めて吹いたんですけれども、少し練習すれば、きっとちゃんと音が出ると思います。こういう丸いものとか、中に空洞があるものに息を当てれば笛になるという考え方は、ずっと大昔からあったと思います。だから、竹あるいはアシのように、中が空洞になっているものはすぐ笛になるということで、どこの国にでもあるんです。

例えば、このプリントにも書いてあるんですけれども、尺八の一番先親になる、いろんな尺八の仲間。ご覧になると分かるんですけれども、これはアシでできています。アシは竹と同じように中が空洞ですから、切って穴を開けると笛になる。大体これはイラン、イラク、ペルシャ、トルコなどの中近東とか北アフリカで吹かれています。非常にきれいな音がするんですが、残念ながら、僕は、この笛だけはあまりいい音が出せません。尺八とは、ちょっと違う吹き方。

(演奏)

クリストファー 仏教とか言葉もそうですけれども、大体、日本の楽器は中国から入ってくるわけです。中国以前は、やはりペルシャ、インド。だから、世界の楽器の拠点というか、生まれた地域としては、大体ペルシャがあると思います。例えば西洋のギターとリュートは、ペルシャのウッドという楽器から来るわけです。ウッドが中近

東からトルコへ行って、トルコからヨーロッパに入って、ヨーロッパのルネサンス時代にリュートになるわけです。そして、リュートを少し簡単にしたものがギターになります。

その逆に、今度はウードが中国に入るとピパになり、中国から日本に入ってくると琵琶になる。だから、琵琶とギターはウードという楽器で共通点があるんです。尺八もそうです。尺八は、先程吹けなかったネイから発生しています。中国に入ってくると、このような楽器になります。そして、韓国に入ると長簫（ちょうそう）という楽器になる。日本に入ると、先程お見せした雅楽尺八になる。それぞれの楽器は、もちろん音色とか材質とか全部違うわけです。

(演奏)

クリストファー 今度、演奏するのは韓国の長簫。

(演奏)

(拍手)

クリストファー 聴いても見ても、尺八と非常によく似ていることが分かります。これらの笛は、ほとんど尺八と同じです。どういう原理かという、縦笛なのは変わりません。ペルシャのネイがヨーロッパに入ると、今度は、このリコーダー、縦笛になるんです。リコーダーの場合は縦笛ですが、徹底的に違うのは、この歌口の吹き方です。リコーダーの場合は、何も工夫をしなくても、吹けば音が出る。ただし、今のような楽器は、吹いても音がなかなか出ない。この違いは歌口です。

(演奏)

クリストファー アジアにも、このようなリコーダー式の楽器がたくさんあります。例えばタイ。こういうリコーダー式笛。これはクルーイと言うんですけども、非常に柔らかい、いい音がします。

(演奏)

クリストファー クルーイは、リコーダーと同じように、吹けば音が出る。吹くのには大して難しくない。

同じように、もうちょっと南のほうに下ればインドネシアです。インドネシアというと、有名なゴング・オーケストラのガムランがあります。最近、日本では芸能山城組によってバリのケチャ祭りとか、いろいろなバリの音楽が有名になっていますけれども、この中で使っている笛はスーリンと言います。

(演奏)

クリストファー これはまたアシでできていて、非常に柔らかいきれいな音だと思います。

ます。

今、東南アジアの話をしているから、これはフィリピンの縦笛です。しかし、今まで見た尺八式でもないし、リコーダー式でもありません。これはどうやって吹くと思いますか。これは口ではないんです。

(演奏)

クリストファー 非常に柔らかくて小さな音です。フィリピンでは、これをどういうふうに使っていると思いますか。これは求愛のための笛です。考えてみれば当たり前です。フィリピンの伝統の家は、下がよく洪水になるので、大体高い所に建ててあります。コロニーの上に建ててあります。男の子は、好きな女の子の家の窓の真下に行って、親に聞こえないように静かに吹く。彼女だけが聴いて、「ああ、彼が来ているな」と思って、こっそりと下に出てくるわけです。そうすると、この笛は非常に役に立つわけです。こういう求愛の笛。

先程も少し触れたんですけれども、考えてみれば、最近では音がどんどん大きくなるわけです。町を歩くと、スピーカーから音がガンガン出てくるし、ショッピングモールの店に行くと、ほとんどBGMがあります。音を大きくすれば、それは一つの権力になるわけです。音が大きければ、力が付くわけです。政治的な力。経済的な力。それは、われわれの一つの基準になってしまいました。だから、われわれは自分の音を作るためには、より大きくしなければ自分が存在しないかのように思ってしまうわけです。

本当は、そうではありません。尺八は、けっこう大きな音ですけれども、こういうフィリピンの鼻笛とか、インドネシアのスーリンみたいに、本当に小さな音です。自分とか自分の好きな人のための音楽として自分の音を作るのには、それだけでいいわけです。

ヨーロッパにも、いろんな縦笛があります。先程、リコーダーをお見せしたんですけれども、今度は尺八と非常によく似ているケーナがあります。

(演奏)

クリストファー ハンガリーのフルヤという笛ですけれども、この二重フルヤが非常に面白かった。

(演奏)

クリストファー 裏を見ると、二つの歌口があるのが分かります。右のほうには穴がない。これは、ずっとドローンみたいな音を出して、スコットランドのバグパイプみたいな感じね。左のほうは穴があります。

(演奏)

クリストファー これだけではありません。これは恐らく世界の中で一番面白い縦笛だと僕は思います。穴がないんです(笑い)。これもまたリコーダー式ですけども、この歌口と下しかないんです。どういう音がするんでしょうか。

(演奏)

クリストファー 何もないほうが自由があるんです。これは穴がないですけども、要するに音の中にあるいろんなオーバートーン、倍音を使って音階を作れるわけです。これはハンガリーのテイリンコと言います。

これで全部かな。一つ大事なのを忘れた。これは私が生まれて育ってきたアメリカ南部のアメリカンインディアンの笛です。もうほとんどいないんですけども。これは多分ニューメキシコ州のサンタフェと言う所で買ったんですけども、また非常に素朴できれいな音です。

(演奏)

クリストファー ここが一番大事な所です。何回も言っていますけれども、歌口の所です。歌口に穴を開けなければ音は鳴らない。だから、笛の一番聖なる所が歌口です。人間にも歌口があります。のどの中にある声帯は、一つの笛です。のど笛と言うんですけども、しゃべったり歌ったりするときには、われわれも、のどの中の笛を使います。のどの中の笛を外に出して、こういう筒に付けると笛になるわけです。だから、笛というのは何かというと、人間の声の延長だと私は思っています。

尺八を吹くときには、やはり歌っています。私は歌声があまり良くないから、実際に歌を歌うと文句を言われるんですけども、尺八を持って歌っているつもりです。声は聖なるものですから、歌口も笛にとって非常に肝心な部分です。アメリカンインディアンたちは、まさにこの辺を聖なる所、お守りと言っているわけです。だから、ここに神が宿っていると信じていると思います。

さて、大体一通り紹介をしたので、今度は尺八のほうに戻りたいと思います。尺八音楽は20世紀になると、けっこう音楽的になってしまいます。私がやっている琴古流は、特に本曲の飾り付け、装飾音が非常に大事にされます。これから演奏する「鶴の巢籠もり」は、まさにそういうとてもいい例だと思います。最初は非常に簡単な材料で、大きな世界を作ってしまう。出だしは「ミ、ソ、レ」で非常に簡単。ちょっとピアノのほうに注目していただくと分かります。ちょっと遠くて申し訳ないですが、この曲の出だしを聴いてください。

(演奏)

クリストファー こればかりが繰り返されている。

(演奏)

クリストファー 極めて簡単です。これはあまり簡単すぎて、もしピアノで本当にやるんだったら、みんな寝てしまうと思います。かえって幼稚になってしまいます。尺八の場合は、いろんな装飾音を入れたり、いろんなテクニックを入れることで、これを面白くするわけです。まず、音に直接入らないで、オクターブ下から入る。

(演奏)

クリストファー 指でアクセントを付ける。それで、「ミ、ソ」のソに行くときには直接行かないで、ちょっとすり下げして、間の音のファを打ってからソに行くわけです。

(演奏)

クリストファー ちょっと指を振ることによってビブラートを与えるわけです。尺八吹きは、これをよくやります。これが「首振り3年」と言われるゆえんになっていると思います。「ミ、ファ、ソ」で、このソからレに行くときには直接行かないで、ちょっとすり上げて「レ」。そして、オクターブ下から「ソ、レ」。そうすると、本当に簡単な材料で、三つの音だけで随分大きな世界を作ってしまう。

(演奏)

クリストファー 最後に尾っぽをちょっと入れるんです。そうすると、さっき言ったように、本当に簡単な材料で大きな世界を作ってしまう。これが10回か12回ぐらい繰り返されているんですけども、機械的に繰り返すわけではなくて、音を早くしたりとか、ゆっくりしたりとか、音量を大きくしたりとか、そういういろんな変化をつける。

(演奏)

クリストファー というふうに音楽を作ります。考えてみれば、これは日本の伝統文化に非常に共通するところがあります。例えば俳句をちょっと想像してみてください。俳句は、本当に簡単な5・7・5の極めて少ない材料、極めて少ない言葉で詠むことによって、見ることによって、想像力を加えることによって大きな世界が作られます。非常に効果的です。

時間がなくなりますから、「鶴の巢籠もり」を演奏したいと思います。これのもう一つのポイントは、鶴の話だから鶴の羽ばたき。

(演奏)

クリストファー また、鳴き声。

(演奏)

クリストファー というように、鶴をまねするような場面もありますから、それをちょっと注意して聞いてみてください。

(演奏)

クリストファー 尺八には、いろんな長さがありますけれども、そもそも尺八をどうして尺八と呼ぶのかは知っていますよね。一尺八寸の長さを示すわけです。一尺八寸があれば、二尺、二尺六寸、二尺四寸も当然あるわけです。今日、最初に演奏したのは二尺四寸で、これは非常に低くて落ち着いた音です。もちろん管が長くなればなるほど、音も低くなりますけれども、落ち着いた音で、本当に瞑想的な本曲を吹くのに適している楽器だと思います。われわれが最も使っているのは、大体この一尺八寸です。ピアノで言えば、これはレに当たる。もうちょっと短い一尺六寸は、もうちょっと高くてかわいい音。

(演奏)

クリストファー これからお正月によく耳にする曲だと思います。本当に今日は、あと2、3曲ぐらい用意したんですけれども、時間がないので。現代尺八の曲も、ちょっとやろうと思ったんですけれども、本当に時間がなくなってしまって、また呼んでくださいね。

司会者 ちょっと途中で入ります。ありがとうございます。とりあえず時間が参りましたので、ここで切りますが、先生は、まだやっってお気持ちはとてもおありのようです。ですから、次の授業がある方たちは、もしお出になるならお出になって下さい。そうでなければ先生のお話を引き続き伺いたいと思います。では、よろしくお願い致します。

(拍手)

クリストファー はい。まず、質問がある方。

司会者 もし質問がおありになる方がいらしたら、ちょっと質問に答えていただきたいと思います。どうぞ。

クリストファー どうぞ、何でも。

司会者 何か質問がおありですか。そちらはご質問ですか。どうぞ。

— 尺八ですけれども、民謡に使われている尺八とは、どのように違うんですか。

クリストファー 構造的には全く違います。民謡尺八も、こういう古典尺八も、構造は全く同じですけれども、民謡の場合は人の声と合わせるために、いろんな長さのものを持って使わなければならない。今日、僕は3本しか持っていませんけれども、

民謡吹きだったら恐らく一尺四寸、五寸、六寸、七寸、八寸、九寸、二尺、二尺二寸ぐらいまで常に持って歩きます。大変ですよ（笑い）。もちろん音楽は違うんですが、構造的には同じです。

— 尺八に値段の差はあるのですか。

クリストファー はい、あります。名器はあるのかという質問ですけれども、確かに非常に価値の高い尺八があります。実は、今、使っている八寸は、自分の師匠の山口五郎のお父さんで山口四郎先生と言う人が作られた竹です。もちろんもう彼はいないですけれども。いくらぐらい……。僕は30年前に30万円ぐらいで買ったんですが、今は200万円ぐらいになるのではないかな。バイオリンとかスタインウェイほどではないですが、けっこういい楽器はいいです。

でも、本当に自分で「これから尺八をやろう」と思うなら、別にこだわらなくてもいいです。10万円か15万円、20万円出せば、けっこういい新しい楽器が手に入るし、楽器も自分と共にうまくなるわけです。あと、何か質問が……。

— お琴と合奏ということがありますよね。そのときに、お琴と合わせる尺八はどの尺八とか決まっているんですか。

クリストファー 大体一尺八寸です。最もポピュラーで、最もいろんな音ができるし、非常に吹きやすくて、幅広い応用ができる楽器です。でも、曲によっては一尺九寸とか一尺六寸。例えば「春の海」とか、宮城道雄が作曲したものは一尺六寸が多いです。大体一尺六寸から二尺の間です。でも、一尺八寸が圧倒的に多いです。

司会者 ほかに何か質問がおありですか。

— 今、尺八奏者は自分で尺八を作っていますか。

クリストファー 昔は分業していませんでした。例えば私の先生のお父さんの時代は戦前ですけれども、尺八を作ったり吹いたりしていました。自分の先生の時代になって、今70代前後にある方は、やはり忙しくなって分業をしています。だから、今はフルタイムで作ったり演奏したりする人はいないです。あ、埼玉県のこの近くに1人ぐらいいますね。でも、少ないです。

もしなければ最後に1曲、残ってくださった人だけに演奏する曲です。

(拍手)

これは自分で作った曲で、冗談でちょっと速めの曲です。

(演奏)

(拍手)

司会者 どうもありがとうございました。

クリストファー いいですか。皆さんが知らない歌ばかりをやってきたので、一つ皆さんが知っている歌をお土産として。

司会者 分かりました。では、もう一つ。

クリストファー 短いので。ちょっと何か本当に聞き慣れない曲ばかりで、どこかでちょっと不満に思われているのではないかと。これは多分、ある程度、年が行っている人なら分かります。若い人のお母さんやおばあさんたちが歌っていました。

(演奏)

(拍手)

司会者 本当にどうもありがとうございました。比較文化研究が一番の研究領域である現代文化学部の主催する教養文化研究所の講演会としても大変素晴らしいお話で、今日はアメリカ出身の方に日本のことを教えていただいた大変いい午後の1時間半だったと思います。クリストファーさん、本当にありがとうございました。

来年度も楽しい講演会を用意するつもりでおりますので、どうぞまたご参加くださいませ。

